
時雨音

りもこん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時雨音

【Nコード】

N2270BA

【作者名】

りもこん

【あらすじ】

目が覚めたら寺で無一文、着流しざんばら頭の姿。
そんな男の人生の1ページのお話です。

その一

右手で草履を持ち、左手でまんじゅうを持つ。

俺の足の裏は、素足でも硬い。

着流しの裾をめくりながら走る。

後ろから勢いよく罵声が飛んでくる。おい待て。このやろつ。

待てと言われて待つわけがない。

食ったばかりでもまだまだ余裕がある。

元陸上部をなめるな。

食い逃げの基本は腹八分目だ。

たらふく食ってしまったら、横っ腹が痛くなってとてもじゃないが走れない。

罵声がだんだんと遠くなっていく。

その呉服屋を曲って裏路地に入れば、もう大丈夫だろう。

一気に身体を傾けて勢いよく右に折れる。

猫が二匹、驚き飛び跳ねる。

スピードを落として左に曲がり、足を止めた。

耳を済ましてみる。人の気配はしない。

家の壁に背中を当ててゆっくりと路地を覗き込んでみる。誰もいない。

草履をぼとりと落とす。

足の裏をはたいてから草履に指を引つ掛けた。

大きく開いた着流しの袖に左手を突っ込んでまんじゅうをしまつ。
右手も袖に突っ込み両腕を組みながら歩き出す。
とりあえずいつもの寺にでも行くか。

俺は逃げてきた路地に出ないように寺へと足を向けた。

その寺は小さな山の中腹にある。

すきま風がよく通り、寶錢箱に金は入らず、住職の代わりに猫と鳥
しかいない小さな寺だ。

俺はそこで目覚めた。

確かに死んだはずだったのに。

今は江戸時代だろうか、ここに来てから一週間は経つ。

最初は訳がわからなかった。

いや、今でも訳がわからない。

レインボーブリッジが見える、港湾関係の会社が立ち並ぶ場所。

そこから身を投げたはずだった。

都会でも夜の海は暗く、夏でも海水は冷たかった。

俺は膝を抱えて丸まりながら底へ底へと落ちていったはずだった。

あんまりオカルトとかは好きではないし、信仰が厚いわけでもない。
だが身を投げたのがきっかけだからか、状況を受け入れるのに時間
はかからなかった。

小さな寺の中で目が覚めたとき、おれは海から這い出したのかと思
うくらいに汗を掻いていた。

最初は天国か地獄かなのかと考えていたが、今ではそのどちらでも

ないのだろうと思っている。

魂なんてあるとは思ってはいないが、俺の魂が時代を超えて誰かの身体に乗り移ったのかとも考えたが、寺に転がっていた汚い柄鏡に曇り気味に写る顔は、確かに俺の顔だった。

シャツにデニムではなくて服装は藍色の着流しに草履。髪の毛も伸びていて、いわゆるざんばらカットってやつになっていた。

なにはともあれ、腹は減る。

寺から降りて街へ行き、一日に一度か二度の食い逃げをして飢えをしのいでいるのだが、これだけ食い逃げをしているのだからそろそろ街にも行きづらくなってきた。

その二

こじんまりとした山を登り、寺に着く頃にはあたり一面が茜色に包まれていた。

いつも通り、人の気配は全くない。

階段なんてものはなく、ただの土の坂道を登ると目の前に寺がある。両脇には松の木やら柳の木やらがあり、奥は竹林になっている。

俺は寺の中には入らず、賽銭箱に腰をかけて夕日を眺めた。木々の中から見える太陽は大きかった。

まるで昔話の一節みたいにガラスがあーあー鳴いている。街や村の子ども達はそろそろ家路に着くのだろうか。

今の状況をいくら考えた所で答えはでない。

考えるべきことは明日はどうやって過ごそうかということ。どうやって生きようか。

.....。

.....生きる、か。

今の状況になってから感じたことがある。

朝は日の出とともに目が覚め、夜は日の入りとともに眠ることだ。

明かりといえれば月明かりと蠟燭くらいしかないから当たり前といえは当たり前だが。

夕日が沈めば寺の周りは真っ暗になる。

最初是不気味に感じたが、今ではなにも気にならない。

快適とはとてもじゃないが言えないけれど。

蠟燭を盗んできて寺の中で灯そうかとも考えたが、灯したところ
することもない。

風が通り抜けた。

思いのほか冷たく、ひとつ身震いをしてから寺の中へ入り戸を閉め
た。

朽ちた仏像になんともないただいまと語りかけ、床に寝転がり天井を
見上げる。

こうしていると、とめどもなく様々な考えが頭の中をよぎる。

強く目をつぶってから力を抜いた。

俺は寝ることにだけに意識を集中した。

その三

肩が痛んでおぼろげに目が覚めた。

床は木の板だから、横を向くと肩が痛い。

寝返りをうつたときに目が覚めてしまったのだろう。

戸ががたがたと揺れていて、風の音を鳴らしていた。

日の光は差し込んでいないからまだ夜中だろうか。

身体を起こして、壁に寄りかかりり座りながら寝てみようとしたが、
どうにも寝付けない。

板の隙間から月明かりが差し込んでいる。

満月かどうかは分からないが、今日は月の明かりが強い。

少し外を歩いてみようか。

怖いもんなてなにもないさ。

そう思いながら戸を半分ほど開け、ふと見をやる。

俺は声も出せずに口を開き、背筋が凍りついた。

女がいる。

白っぽい服を着た女だ。

女は俺には気がついていないのだろうか、こちらに身体は向けている
が正座をしてうなだれている。

髪は顔を全て隠すほど長い。

音を立てないようにくるりと戸に背を当てて、ゆっくりと座った。

あれはなんなんだろうか。人間なのか幽霊なのか。

でもある意味、俺だって幽霊みたいなもんだ。きつと平気さ。

しかしその根拠のない自信は一瞬にして崩れ去った。

「にくい．．．にくい．．．」

俺はぞっとする。

「憎い．．．憎い．．．」

おいおい、やめてくれよ。

「ニクイ．．．ニクイニクイ．．．ニクイニクイニクイ．．．」

思わず目をつぶり耳をふさぐ。
すると何も聞こえなくなった。

一瞬だけ考えこむ。

こういうものは耳をふさいでも聞こえるもんじゃないのか。

俺は恐る恐る目を開ける。

俺の目に、目を見開いた女の目玉が飛び込んできたら嫌だなと思っ
たけれど、いらない心配だったようだ。
耳をふさいでいた手を外す。

すると女の細い声が聞こえる。

「憎んでも仕方ないことはわかっています」

女は泣いているようだった。

「どうしてこうもつまらないのでしょうか」

女は続けた。

「私はあるところへ嫁ぎたくなんてありません」

女はすすり泣いてから、呟いた。

「・・・死んだほうがましなのです」

何時の時代も、色恋沙汰はうまくいかないもんなんだな。

いつの間にか俺の恐怖心はなくなっていた。

よく知らない女の、憎しみというよりも悲しみが伝わってきた。

その四

女の声は聞こえなくなったが気配はまだ消えない。

俺は戸に寄りかかったまま、背中をこするようにしてゆっくりと座った。

月明かりは依然として強い。

身を投げる前、俺は普通のサラリーマンだった。

朝の8時から夜の11時くらいまでひたすら働くサラリーマン。

恋人とは別れて半年が経っていた。

努めて5年以上経っていたけれど、日が経つに連れてやりきれない思いばかりが募っていた。

今思えば疲れきっていたのかもしれない。

死のうとせずに会社を辞めればいいだけだったのに、なぜかそれが世界の終わりのように感じていた。

結婚しているわけでもないし、子どもがいるわけでもないのに。

あの女は死のうとはしないだろうか。

この時代の人間の寿命は分からないけれど、平成の時代ほど長くはないだろう。

けれども何十年の間、耐え切れるのだろうか。

それとも決断してしまうのだろうか。

俺には関係のない話。

むしろ力になりたいと思っても、なんの力にもなれない。

そのまま倒れこみ、肘を枕にして、もう一度眠る。
妙な緊張を感じたせいかな、よく眠れそうな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2270ba/>

時雨音

2012年1月8日20時46分発行